

入来の文化振興を考える

中西 喜彦



私が昭和39年7月大学牧場建設予定地（入来町浦之名大谷）に入山して、早くも60年が経ちました。牧場は昭和43年に開場しましたが、その年は丁度明治百年と言われておりました。入来町も庁舎が新設されたり、記念の要覧ができたりしていました。その要覧の中に入来町の文化財として清色城跡、茅葺門、入来文書が紹介されていました。しかし、在職中は全く入来の文化財のことは知りませんでした。

入来院ご夫妻は平成6年に東京から定年を機に帰郷し前述の文化財を中心に文化事業を振興してこられました。

研究者間では有名であった入来文書の解説などを行い、その普及に努められました。また、武家社会の紹介の一端として清色城跡で薪能を開催されました。

そのうち平成14年に第4回の薪能として貞子さんは地元を題材にした「鳥追舟」を現在の薩摩川内市総合運動公園（サンアリーナせんだい）で開催し、記念にJR川内駅前とその母子像が建てられました。

平成22年に第7回入来薪能があるということで鹿児島謡曲連合会の会報に入来薪能に関する記事をお願いするために入来町浦之名麓にある入来院家の茅葺門を始めてくぐりました。

それ以来入来院ご夫妻の文化財を活用した文化振興事業を知ることが出来ました。

貞子さんは筆者がお会いした翌年にはお亡くなりになったので入来院重朝さんと相談

し「貞子さんに誌上で再会」を旗印に本誌にそれまでの振興事業の内容を取り上げてきました。薪能の開催の様子やその苦労が関係者の投稿で明らかになっています。早いもので昨年、貞子さんの13回忌を終えました。

2年前から長女の久子さんによって「入来花水木会」を再興し、研究者の講演や新著の紹介などが行われています。筆者が入来と縁が出来て振り返ってみると入来を取り巻く社会情勢の変化は著しいものがあります。大学牧場の横には鹿大理学部为天体望遠鏡と、氣象庁の電波望遠鏡が設置されています。また、牧場設置時にあった町営肉用牛繁殖育成センターは城山ゴルフ場に変わっています。また、大学から牧場まで45キロあった距離が道路拡張や新設により、25キロまでに短縮されています。

入来町は、市町村広域合併により薩摩川内

市になりました。入来文書に裏打ちされた入来院家の歴史は、日本の封建社会の成立から終焉までの歴史で、世界的にも希有なものだと思います。そこで、目的を大きくして世界文化遺産登録を想定して活用したらいかがでしょうか。

最近、沖縄県の八重山列島のことをヘブライ語で尊い山という意味だと聞きました。入来にある八重山の由来も同じような意味ではないかと思っています。入来の八重山は、川内川や甲突川の源流となっています。入来の八重山の意味は、水に恵まれた山という意味ではないかと思っています。

現在、第2次大戦後の米国の一国支配が終わり、いわゆるグローバル化から多極化の時代に移りつつあります。このような時期に、入来麓において長期政権が続いた理由を新しい手法や新しい視野で追及することは、意味



薩摩川内ゆかりの宝生流・能『鳥追』（シテ：石黒実都、子方：吉満剣心）。令和5年10月22日、於：かごしま県民交流センター。「訴訟のために都に行き、十数年振りに帰国した日暮の主人は、わが妻子に鳥追いを見せていた左近尉を討とうとする。すると妻がそれを止め、ことの発端は夫が十数年も留守にしたことにあると諫め、能の鳥追舟はハッピーエンドで終わる。道理を弁えた妻の、愛情深く、気丈な振る舞いが印象的。室町時代から継承されてきた能である。」

があることと思います。

今年、佐渡の金山が世界遺産に登録されました。入来院家の今までの30年に渡る文化活動を一層意義あるものにするにはもう一つ大きな目標が必要だと思っています。世界遺産登録を目標にしたらどうでしょうか。八重山を中心とした日本封建社会の持続の理由を明らかにしてほしいと思います。今や八重山の住民となった鹿大や城山観光ホテルや、薩摩川内市を巻き込んで大きな組織を作り上げ新しい展開を考えてほしいものです。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学名誉教授、炬ばたセイ談会会長）

